

21. 大腿骨頭壊死における骨シンチとMRIの比較

牧野 直樹 浅井 英彰 伊藤 健吾
児玉 行弘 石垣 武男 佐久間貞行
(名古屋大・放)

1か月以内に骨シンチとMRIを施行することができた特発性大腿骨頭壊死の症例で、両者の診断的意義を検討した。

対象は特発性大腿骨頭壊死15症例21関節で、股関節X-Pによる病期診断に基づき、骨シンチとMRIの所見を比較検討した。

初期例特に超早期例の診断や微細な病変の検出には、MRIは有用であった。初期例ではT₁画像とT₂画像の解離が多く、T₁画像は病変を広めに描出する傾向がありMRIの問題点である。骨シンチとの比較からは解離部位は修復機転を中心とする反応部位に一致するようであったが、病変の反応性に関する情報としては骨シンチの方が勝っていた。壊死巣の描出にはT₂画像が鋭敏であった。SPECT像と骨頭内側下部の状況から、骨シンチによる病期診断の可能性が示唆された。

22. ¹²³I-IMPによる肺シンチグラフィー

伊藤 健吾 伊藤 茂樹 牧野 直樹
阿部哲太郎 石垣 武男 佐久間貞行
(名古屋大・放)

N-isopropyl-p-[¹²³I] iodoamphetamine (以下IMP)の肺集積性を利用して肺シンチグラフィーを行い、その意義について検討した。IMP 3 mCiを急速静注後ダイナミックスタディを行い次にプラナー像、SPECT像を得

た。結果は、1) 正常例においてはIMPは初回循環で高率に肺に集積し、以後徐々にクリアーされる、2) 正常例のプラナー像およびSPECT像は^{99m}Tc-MAA肺血流シンチのイメージに類似している、3) 疾患例では肺からのクリアランスの低下を示すものがありプラナー像およびSPECT像で^{99m}Tc-MAA肺血流シンチとの解離を示すものがある、4) IMPによる肺血流シンチグラフィーは肺の非呼吸性機能を反映している可能性があり、それを利用した病態の解明、疾病の早期診断が期待される、であった。

23. IMP-SPECTと脳RNアンギオの比較

仙田 宏平 中条 正雄 岡江 俊治
嶋田 博 安江 森祐 辻 明
豊吉 久代 (国立名古屋病院・放)

脳血管撮影とX線CTにより閉塞性脳血管障害と診断された18症例(性別; 男14例女4例、年齢; 57.3±12.0歳、発症からの期間; 1か月以内5例、6か月以上4例)について、脳RNアンギオの有用性を直前に施行したIMP-SPECTと比較検討した。

脳RNアンギオは、IMP-SPECTと比較し、脳血流減少の局在ならびに程度を診断する上で劣っていたが、大血管または比較的太い脳血管の閉塞または狭窄の部位ならびに側副灌流の領域および程度を判定する上に意義があった。他方、他検査で見られた同一虚血巣におけるIMP集積低下の程度は、脳RNアンギオにおける灌流減少の程度が高いほど強く、また側副灌流の程度が高いほど弱くなる傾向を認め、脳RNアンギオは虚血巣の評価に有用であった。